

シナリオ風メモ
「かまどのめし」



20240112AM0110



エリー



目次

0、カエデ誕生	1
1、カエデの性質	2
2、タロット占い	3
3、飯炊き修行	5
4、一人立ち	7
5、みんなの気持ち	9
6、村の価値観	11
7、科学の力	12
8、マニュアル対応	13
9-0、残された問いかけ	14
9-1、電気釜のご飯	15
9-2、父と会う	17
9-3、プロポーズ	20
10、時は流れて	21
11、母が倒れる	22
12、初盆	23
13、共同葬儀	24
14、天に届け	25
15、在りし日の似姿	26

0、カエデ誕生

○ユウギリの部屋のダイニングキッチン(夜)

玄関につながる6畳ほどの洋室。

台所でユウギリが歯磨きしている。

激しくチャイムがなる。

泡だらけのまま玄関に出るユウギリ。

キウイとヘチマが先を争って報告する。

ヘチマ「今、ついさっき、産まれって連絡がきて。女、女の子！」

キウイ「ユウギリさん、赤ちゃんのホロスコープ、見てください！」

ユウギリにぐいぐい迫るヘチマ。

ユウギリ「ヘチマとキウイも待て。見ての通り、わたしは歯磨きの途中だ」

ダイニングテーブルに並んで座るキウイとヘチマ。

向かいには端末を覗くユウギリ。

ユウギリ「まったく、落ち着きがない。子どものころからキウイもヘチマも！」

ヘチマ「またヘマって言うんでしょ！ 嫌だよ、その呼び方は」

キウイ「同級生が優秀だと辛いよなあ。いつも比べられて」

ヘチマ「でもさ、ポトスも人間。奥さんが心配で同級生の俺らに頼んできたし」

キウイ「母親のオモトさんも、娘のカエデちゃんも元気で、泣いてました」

ヘチマ「父がポトス、母がオモトさん。しっかりものの両親の娘だから有能なんだろうなあ」

ユウギリが端末でホロスコープを見る。

太陽と金星と土星が4ハウス牡牛座で重なっている。

ユウギリ「五感を育てることが人生の目的だが、課題でもある。成長に時間がかかるだろう。愛ゆえに迷う」

ヘチマ「つまり、どんくさい？」

キウイ「俺らと同じ？」

親近感と心配で顔を見合わせる。

キウイとヘチマ「ポトスの代わりに俺らが見守る！」

キウイとヘチマが、親指を立ててみせる。

1、カエデの性質

○給食室 (夕方)

夕飯の準備で、大人たちが調理している。
オモト、ヘチマ、キウイ、カエデもいる。
ほうれん草を茹でるお湯を沸かしている。
オモト「底から小さい泡が出たら教えてね」

カエデは鍋をじっと覗いている。
(わあ、小さいシャボン玉みたい。
シャボン玉といえば、パチンと割れて目に入った時は痛かったな。
シャンプーに失敗した時みたいだった。
シャンプーといえば、ユウギリさんの香り、とろんと甘くていい匂いだな。
お小遣い稼いだら買ってみようかな。でもマドレーヌ食べてみたいし、うーん……)

煮えたぎる鍋の湯。

オモト「鍋！」
カエデ「は！」

ヘチマとキウイが心配をする。
ヘチマ「やっぱり来年は早いよ。7歳からは無理。米炊きを延期した方がいいのでは？」
キウイ「俺らが村に話をつけますよ」
オモト「大丈夫よ。普通、付き添いは1週間だけどねえ、1年しようと思うの。それでいいでしょ、カエデ？」
カエデは、米炊きさせてもらえないかとハラハラしていたが、ほっとする。
カエデ「うん！」
母のオモトに抱きつく。

2、タロット占い

○ユウギリの家のダイニングキッチン(夕方)

ユウギリがダイニングテーブルで、ライダー版タロットを展開している。

オモトが、カエデを連れて、どうしてあげるのがよいか、ユウギリに相談してる。

ユウギリ「カエデ、今から話すことをよく覚えて起きなさい。宗教は廃れたが、こうして占いの価値観は共有された。誰でも占うわけではない。しかし、いいこと、わるいことはみんな一緒だ」

カエデ「違うと困るの？」

ユウギリ「困る。生き物として食べて、出して、寝る。子どもを産み育てる。人生で生活する以上に大切なことはない。だが」

何を言うのか、じっと聞いているカエデ。

ユウギリ「弱いものが楽に暮らせるものを作るためには、無いものを買わねばならん。そのためには外国から金を稼いで資源を買う必要がある。カエデの父ポトスは輸出して外貨を稼いでいる」

誇らしいカエデは、鼻を膨らませてにーっと笑う。

ユウギリ「大人も子どもも、衣食住は配給される。だがしかし外貨を稼げる人物に育てるために、働いてない子どもは、小遣いを稼がねば、欲しいものは買えない」

カエデ「わたしはわらを燃やしてかまどで飯を炊くの！ それでまだたべたことのないマドレーヌを買うの！」

ユウギリ「いいことだ。150年前の日本は同じ年の子どもを集めて、部屋に閉じ込め、正解を教えた。その結果、大雑把な知識だけで、現実を知らず、行動できない人間が増えた。集中力を鍛えてないから、分かるだけで、できない」

カエデ「カエデはできるようになるかな？」

ユウギリ「なかなかできなくても、年下に追い越されても、くじけずに続けるなら」

カエデ「そんなに時間がかかるの？」

ユウギリ「ああ、もしかしたら、一生かかるかもしれん」

カエデ「一生、マドレーヌが食べられないの？」

泣きそうにうつむくカエデ。

ユウギリ「13歳から15歳で工場勤めすれば、16歳から村の仕事をして小遣いももらうか、街に出て稼ぐことになる。村に戻るなら、できるようになっても、できるようにならなくても、16歳で食べられる。安心しなさい」

カエデ「うん！ それならあきらめないで頑張る」

黙って聞いていたオモトが、カエデの頭をなでる。

3、飯炊き修行

○調理場 (朝)

カエデが2升炊ける大きな羽釜を机に運んでいる。

力持ちなので運ぶのは楽勝。

隣で母のオモトが見ている。

オモト「米の計り方は知っているね？」

カエデ「うん！」

1升枡に米をすくい、山盛りのまま入れようとする。

オモト「待って。平ら！」

カエデ「あ！」

小さな手ですりきれ1杯にする。

そしてもう1杯入れる。

オモト「今日は入れ方を覚えたね。あとはわたしがやってみせるから見てて」

オモトが羽釜を受け取り、米を磨ぐ。

キラキラした瞳でカエデが見てる。

かまどに羽釜が据えられる。

藁に火がつく。

オモト「水がぶくぶくになるまでちょっと強めにするの。音が変わるから聞いていて」

耳に手を当て音を聞くカエデ。

(水が怒ってる。ジリジリ言ってる。お尻に火をつけられてるもんね。熱いよね。カエデ
だったら怒っちゃうよ)

オモト「今の音！」

カエデ「え!？」

手際よくオモトが火を落とす。

カエデ「全然分からなかった」

オモト「火を使ってる時によそ事考えてちゃだめよ」

カエデが首をかしげる。

カエデ「よそ事ってなに？」

オモト「今はご飯を炊いてる。火と水の様子以外のことよ」

悩むカエデ。

カエデ「水が怒ってた」

オモト「それは水のことだけど、ご飯を炊くことには関係がないよね？」

カエデ「あるような、ないような……」

オモト「ないよ」

違いが分からず考え込むカエデ。

炊いてるところを見ずに、どうして関係がないのか、頭のなかで問い続けている。

オモト「カエデ、ちゃんと見てないとだめよ」

考えに夢中で気づかないカエデ。

オモト「炊けたわ」

カエデ「え、もう？」

蓋を開けようとするカエデ。

オモト「ダメ！」

カエデの手を押さえる。

カエデ「どうして？」

オモト「蒸らさないのだめなの」

椅子に座ったオモトが手招きする。

カエデがオモトの膝の上に乗る。

オモト「都会では電気釜で炊くの。不味くはないけど、最高じゃない。かまどで炊くのは大変。でも最高の味になる。わたしのご飯の味を覚えてね」

カエデ「うん！」

オモトに抱き締められ、希望に燃えているカエデ。

4、一人立ち

○村の住宅街 (薄暗い早朝)

ヘチマとキウイが給食室の前で体操してる。

8歳になったカエデが現れる。

ヘチマとキウイ「おはよう！」

カエデ「おはよう！」

ヘチマ「今日から一人で炊くんだろ。困ったら俺たちをすぐ呼びな」

ニッコリするカエデ。

カエデ「ありがとう。でも大丈夫。1年も習ったもの！」

キウイ「頑張ってる！」

手を振り、建物に飛び込んでいくカエデ。

○調理場 (朝)

羽釜を机に運ぶ。

2升の米をちゃんとすりきれで入れる。

水で米を磨ぐ。

受けるざるにかなりこぼす。

カエデ「あ、やっちゃった！」

ざるから羽釜に戻す。

かまどに羽釜を据える。

藁に火をつける。

水が沸く音に耳を傾ける。

(だんだん大きくなってきた。もういいかな。まだかな。分かんないや)

強火のまま炊き続ける。

○給食室 (朝)

ご飯を待つ村人たち。

カエデが羽釜を運んでくる。

蓋を開けると米は真っ黒。

ハガネ「朝飯ぬきかよ！」

ヘチマとキウイがハガネの口をふさぐ。

○調理場 (朝)

焦げた羽釜を洗うカエデ。
カエデ「お母さんのように上手になるぞ」
涙をぬぐって顔をあげる。

5、みんなの気持ち

○河原(夕方)

釣りをするヘチマとキウイ。

カエデが二人に気づいて近づく。

二人はおしゃべりに夢中でカエデに気づかない。

カエデが声をかけようとした瞬間。

ヘチマ「ドキドキハラハラのカエデ飯は10日に1回かあ……」

キウイ「米炊き当番は30人いるからなあ」

逃げ出そうとしてスッ転ぶカエデ。

ヘチマとキウイ「カエデちゃん!？」

振り向いたカエデは泣いている。

ヘチマ「聞いてたの？」

キウイ「悪い意味じゃないんだ」

駆け出すカエデ。

○自宅(夕方)

オモトが台所で焼き菓子を食べている。

玄関からカエデが飛び込んでくる。

カエデ「わたし、米炊きやめたい」

言い終わるとおいおい泣く。

オモト「どうしたの？」

カエデ「河原でヘチマさんとキウイさんが釣りしてて、近づいたら、ドキドキハラハラのカエデ飯って言ったの！」

オモトがカエデの頭をなでる。

オモト「失敗しても食べてくれるのに期待に答えないでどうする！」

しゃくりあげるカエデ。

カエデ「だってわたしが食べても不味いもん。みんな嫌だよね」

ぎゅっとカエデを抱き締める。

オモト「カエデならできる。お母ちゃんが死ぬ前にうまいめしをたべさせておくれ」

首をかしげるカエデ。

カエデ「カエデがおばあちゃんになってもいいの？」

オモト「いいよ。長生きして待つから」

涙をぬぐうカエデ。

オモト「顔を洗ってらっしゃい」

カエデ「うん」

流しに行くカエデ。

オモトが玄関をそっと開ける。

頭をかきながらペコペコ謝るヘチマとキウイ。

ヘチマが釣りたての小魚を差し出す。

オモト「ヘチマとキウイが魚やいて食べようって来てるけどどうする？」

カエデ「いく！」

顔をふき、玄関に向かうカエデ。

ヘチマとキウイ「傷つけてごめんな」

カエデ「本当のことだからいいの。泣いてごめんね」

ヘチマとキウイの真ん中にカエデ。

手をつないで歩き出す。

後ろからオモトもついていく。

6、村の価値観

○給食室 (朝)

窓の外にヒマワリが咲いている。

室内では村人が待ってる。

ハガネ (7) もいる。

むすっとしてる。

カエデ (8) が羽釜を運んでくる。

蓋を開けるとご飯がべちゃべちゃ。

ハガネ「僕、食べない。カエデのごはんはすごくまずい。もう米を炊かないでほしい。代わりに僕が炊く」

ヘチマとキウイがハガネの口をふさぐ。

ヘチマ「頑張ってるカエデになんてこという」

キウイ「お前も泣かせたじゃん！」

ばつが悪そうに頭をかく。

ユウギリ「成長を信じて見守らないのは悪いことだ。ハガネは村から出ていきなさい」

カエデがハガネをかばう。

カエデ「本当のことだからいいのよ。叱らないで」

振り返り、ハガネの目を見るカエデ。

カエデ「わたしには、うまい飯を炊くという夢があるの。やめない。だから教えて」

ハガネ「教えを請うなら、俺に頭を下げられるのか？」

深々と頭を下げるカエデ。

カエデ「よろしくお願いします」

照れ臭そうに鼻をいじるハガネ。

ハガネ「いいだろう。明日の朝は俺の当番だから来い」

カエデ「はい！」

ユウギリがヘチマとキウイを見てうなづく。

キウイ「さあ、たべようぜ！」

ヘチマ「これが最後の失敗かも知れないから、味わおうぜ！」

キウイがヘチマの頭をポカンとはたく。

ヘチマがカエデを見る。

口に手を当てて笑ってる。

7、科学の力

○調理場 (早朝)

ハガネとカエデがいる。

ハガネ「大事なものは数字！」

きょとんとするカエデ。

ハガネ「米だけじゃない。水も、藁も、加熱する時間も、全部はかる！」

カエデ「はい！」

タイマーや計りや計量カップが机に並んでいる。

ハガネ「俺が言う数字をメモれ」

カエデ「はい！」

ポケットから端末を取り出し、メモアプリを開くカエデ。

8、マニュアル対応

○調理場 (早朝)

カエデが一人でご飯を炊いてる。

(ふう。米も水も藁もはかった。加熱時間もタイマーしてる。失敗はないぞ)

窓の外を見る。

灰色の雲が流れていく。

(雨が降るのかしら?)

かまどから離れて窓に近づく。

窓ガラスに雨つぶが打ち付ける。

ピカッと光る。

ゴロゴロ。

カエデ「きゃっ」

タイマーがピピピピとなる。

羽釜から蒸気が出てる。

カエデ「は！」

急いで火を小さくする。

カエデ「ふー。焦げてないよね？」

またタイマーをセットする。

○給食室 (朝)

村人が待っている。

ハガネ、ヘチマとキウイ、ユウギリ、オモトもいる。

カエデが羽釜を運んでくる。

ふたを開ける。

つやつや。

ハガネ「俺の指示がいいからな！」

カエデ「うん。ありがとう！」

みんな笑顔になる。

9-0、残された問いかけ

○調理場 (朝)

ほぼ空になった羽釜を眺めている。

残ったご飯を集めてタッパーに詰める。

一口つかんで口にに入れる。

(美味しい。でもお母さんの味じゃない。何がちがうんだろう?)

首を傾げるカエデ (8)。

9-1、電気釜のご飯

○寮・ 外観 (夕方)

家が建ち並ぶ住宅街の一角。

20室くらいある木造アパートの寮に入っていくカエデ (13)。

振り向くと夕日が沈んでいく。

○寮・ 給食室 (夕方)

トレーに乗ったご飯と味噌汁とおかずの唐揚げを受けとるカエデ。

席について一口食べる。

(これが電気釜のご飯。香りも弱いし、甘味も少ない。不味くはないけど.....)

周りを見る。

みんなびっくりしてる。

(かまどのご飯しかたべたことないもんね。分かるよ。わたしも同じきもちだよ！)

初めて唐揚げを食べる。

美味しくて微笑む。

○工場・ ライン

カエデがランプのついた機械から、商品を回収している。

必死。

次々ランプがつきパニック。

たまりすぎて警報が鳴る。

○事務室 (夜)

応接間に座る事務員。

お茶を飲んでいる。

カエデが入ってくる。

手で合図され、ソファーに座るカエデ。

事務員「もうすぐ卒寮だけど、進路は？」

カエデ「村に帰ろうと思います」

事務員「チャレンジもせずには？」

カエデ「わたしみたいなどんくさいやつに無理です」

資料を見る事務員。

事務員「お父さんは有名な貿易商でしょ。会わなくていいの？」

カエデ「……焼き菓子のお礼が言いたいかも……」

資料を閉じる事務員。

事務員「忙しい方だからお盆にも帰れない。39 過ぎてるから村に戻ることもない。会うなら今しかない」

うつむくカエデ。

カエデ「……はい」

逃げるように出ていく。

9-2、父と会う

○高層ビル・外観 (昼)

巨大なビルの間をカエデが歩いている。
一際目立つガラス張りのビルに入っていく。

○応接室 (昼)

サンドイッチを食べるポトス。
カエデが入ってくる。

ポトス「来たか！」

立ち上がって手を差し出す。
握手するポトスとカエデ。
父の手のごつさにちょっとビビるカエデ。

ポトス「明日から3ヶ月出張だ」

カエデ「いつも焼き菓子をありがとうございます」

うんうんとうなづくポトス。

ポトス「カエデはなんの商売を始めるんだ？」

びっくりするカエデ。
言葉がでない。

ポトス「まずは自力で3ヶ月頑張ってみなさい。結果で判断するから」

うつむくカエデ。

カエデ「……はい」

応接室を出ていく。

○木造アパート・外観 (昼)

かなりボロい。
カエデがリュックひとつで入っていく。

○木造アパート・室内 (昼)

端末で残金25万ポイントを確認する。
求人を検索する。

○ラーメン屋 (夕方)

カエデがどんぶりを落とす。

ガチャンとすごい音が響く。
店主「ばかやろう。1時間で10回目だ。クビ！」
頭を下げるカエデ。
カエデ「すみませんでした！」
泣きながら去る。

○内職工場・室内(昼)

机にむかって、プラスチックの小物にヤスリをかけている。
カエデも真剣に取り組んでいる。
完成品を監督に見せる。
ぶちきれそう。
監督「不良品ばかり。無駄にした分、金を払え！」
カエデ「すみませんでした」
頭を下げる。

○アパート・室内(夜)

端末のお金が65円。
カエデ「来月の家賃ない。出なくちゃ。でも村にも帰れない。どうしたら……」
端末の充電が切れて真っ暗になる。
泣き出す。

○公園・ベンチ(夜)

カエデがベンチで寝てる。

○公園・ベンチ(朝)

カエデが目を覚ます。
足元に人が座っている。
ポトス「起きたか」
体を起こしてうなづくカエデ。
ポトス「すまなかったな。本当は村に帰るつもりだったのに、無理矢理挑戦させて」
端末を差し出すポトス。
充電されてる。
通知音が鳴る。
ポトス「10万送金した。交通費だ。駅まで送る。帰りなさい」
カエデ「情けない娘でごめんなさい」
涙と鼻水をぬぐうカエデ。
ティッシュを差し出すポトス。
ポトス「レベルにあったことを頑張りなさい。うまい飯を母さんにたべさせるんだろ？」
カエデ「はい！」
鼻をかむ。

9-3、プロポーズ

○村・自宅(昼)

窓から入道雲が見える。

玄関チャイムが鳴る。

カエデ(17)が扉を開ける。

ハガネ(16)が立っている。

カエデ「お盆だから帰ってきたの？」

後ろから紙袋を出す。

ハガネ「これ、やるよ」

中を覗くと焼菓子と書いてある。

カエデ「嬉しいけど、どうして？」

ハガネが辺りをうかがい、玄関に入ってきて扉を締める。

緊張するカエデ。

ハガネ「村のために戦うなら、守る人数は多い方がいい。俺の子どもを産んでくれ」

カエデ「いきなり子ども？」

うんうんとうなずくハガネ。

ハガネ「今すぐでなくてもいい。カエデがよいと思ったらでいい。ダメか？」

無言で焼き菓子の包みを開ける。

マドレーヌを一口食べる。

カエデ「こんなに美味しいものくれるならいいかな」

ハガネ「よし！」

ガッツポーズするハガネ。

(お父さんもちがう店の焼菓子送ってくれる。倍も食べられるなんて幸せ)

微笑むカエデ。

10、時は流れて

○調理場 (早朝)

カエデ (20) が飯を炊いている。

真剣に火の様子を見ている。

タイマーがなる。

羽釜の湯気の具合を確認する。

(違いが分かる気もするけど、失敗したら村の人に迷惑がかかる……)

○高速で移り行く景色。

N「ちっちちちちっ

ざっざっざっざっ

ぶくぶくぶくぶく」

カエデ「あ！」

(今、音が変わった気がする)

N「ちっちちちちっ

ざっざっざっざっ

ぶくぶくぶくぶく」

カエデ「は！」

(今と思ったときタイマー鳴った)

カエデが赤ん坊をおんぶしている。

だんだん大きくなる。

もう一人増える。

二人目も大きくなる。

一人目がいなくなり、3人目の赤ん坊が背負われている。

カエデがおばさんになる。

11、母が倒れる

○山の斜面(昼)

カエデ(50)が山菜を摘んでる。

ヘチマの声「カエデさん、すぐ帰って！」

立ち上がるカエデ。

山菜が散らばる。

カエデ「どうしたの？」

息を切らせてヘチマが来る。

ヘチマ「はあ、はあ。オモトさんが。はあ、はあ。倒れた」

走り出すカエデ。

○ヘリポート

ベッドでヘリに運ばれるオモト。

カエデが駆け寄る。

カエデ「死なないで、まだうまい飯を食べさせてない！」

弱々しい手を伸ばすオモト。

オモト「普通でいいのよ。普通で十分」

ヘリの扉が閉まる。

見送るカエデ。

○自宅(夜)

台所でうつ伏せになり、カエデが泣いている。

12、初盆

○自宅・玄関の外(早朝)

ヘチマとキウイが立ってる。

玄関の扉を激しく叩く。

ヘチマ「もう夏だぞ。お盆だ」

キウイ「カエデさんが炊かないなら今年は飯抜きだ。本気だぞ！」

ヘチマがガチャガチャ扉を回す。

ヘチマ「オモトさんの初盆に、うまい飯を食わせてやりなよ」

キウイ「カエデさんならできるよ。迷惑とか考えるな！」

扉が開く。

カエデ「本当にできると思う？」

目が腫れて、髪が乱れてる。

ヘチマ「40年以上炊いてるんだ。できるさ」

キウイ「自分を信じて！」

うなづくカエデ。

13、共同葬儀

○調理場 (昼)

机の上に計量器が並んでいる。

マスで2升図る。

米をとぎ、水を切る。

ざるに米つぶが落ちてない。

水を計ろうとして、やめる。

感覚を頼りに注ぐ。

手触りで藁の量を決める。

かまどに火をつける。

羽釜の音に耳をすませる。

(変わった！)

火を落とす。

蒸らすのを待つ間、手を合わせて祈りを捧げる。

ふたを開ける。

つやつやでおいしそう。

(見た目は大丈夫。問題は味よ。式が終わるまで口にできない)

顔をおおって、肩をひくつかせて、泣くのを我慢してる。

○共同墓地・全景 (昼)

石の祠に茶碗に山盛りのご飯と味噌汁が備えられてる。

村人が集まって手を合わせている。

音楽が始まる。

葬儀歌手のリードでみんな歌う。

(うまいごはんを食べさせたかったよ)

見上げると雲ひとつない青空。

母の笑顔を思い出す。

14、天に届け

○給食室 (昼)

カエデ、ヘチマ、キウイ、ハガネがいる。

カエデが涙をぬぐっている。

ヘチマが食べる。

驚く。

キウイも食べる。

驚く。

手を取り合って喜んでる。

カエデに駆け寄るヘチマとキウイ。

ヘチマとキウイ「食べてみな」

カエデ「でも」

カエデの背中をパンパン叩くヘチマとキウイ。

カエデが一口食べる。

(お母さんの味だ)

喜びの涙が流れる。

ハガネが食べる。

ハガネ「うまい！」

カエデがにっこり笑う。

ヘチマ「おまえ、まずいけなしたくせに」

ハガネ「そうだっけ。おぼえてない」

懐かしくて笑い出すカエデ。

15、在りし日の似姿

○給食室 (朝)

カエデ (60) とヘチマとキウイがご飯が炊けるのを待っている。

ヘチマ「カエデさん、お疲れさま」

キウイ「10年もうまい飯を食わせてくれてありがとう」

ニコニコ聞いているカエデ。

ヘチマ「ハラハラどきどきのカエデ飯が懐かしいよ」

初めて一人で炊いた7歳の子どもが、羽釜を運んでくる。

一口食べる。

芯がある。

顔を見合わせるカエデとヘチマとキウイ。

みんな懐かしい。

(この子は何年で炊けるかな?)

楽しそうにご飯を食べている。

シナリオ風メモ「かまどのめし」20240112AM0110

著 ELYE

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
